

わが町の赤ひげ先生

坂崎 広典

わが町といっても、ほんの五、六十年前までは、邑久郡鶴山村鶴海だった、それ以来町村合併を繰り返して、今では備前市鶴海と地区名も変わった。人口も村だった頃は3000人を超えるものだったが、今では1500人ほどになってしまった。

この地区で昔から続いているものといえば、小さな食品雑貨店と醸造酢を作る酢屋という倉庫と間違えられるような古い建物、それにK歯科医院とK内科医院だけになってしまった。

昭和10年代から工場誘致で、瀬戸内海の入江にある鶴海地区に化学工場を建設し、そして次々と耐火煉瓦の工場を誘致した。その頃の鶴海は、自給自足で生活用品は何でもこの地区でそろえることが出来た。

このK内科医院は、K医師の祖父である大先生が大正時代に開業した医院である。この大先生は、明治時代の宮内省の御殿医であったとか。

この大先生の子息は歯科医師となりK歯科医院を開業した。妻は眼科医だったが大先生の手ほどきを受けて内科も見ることがようになった。そして3人の子供を育て、長女は薬剤師、長男がK歯科医院を継ぎ、次男であるK医師がK内科医院を継いだ。

この鶴海地区は交通の便が悪い。自家用車ならどこへでも出掛けられるが、車のない人、免許を持っていない人、特に免許返上や足腰の悪い高齢者には不便の上ない地区になってしまった。

そこでこの町で三代続いたK内科医院のK医師、「赤ひげ先生」の出演

となる。ちよつとした風邪で薬が欲しい、熱がある、腹具合が悪いとか、筋肉痛なんかでもK医師を頼るようになる。

しかし、この先生は口が悪い。

「昔は、働かざるもの食うべからず。人は働けなくなると死んでゆくのが自然の成り行きだった。しかし今では皆、少しでも長生きしようとする」

「うちの父親は75歳、母親は95歳で死んだ。母親のあとを引き受けてから30年、当時の患者はまだ若かったが、今はみんな後期高齢者だ。私も高齢者の部類の67歳になってしまった。妻を白血病で亡くして10年が過ぎた」

「後期高齢者の患者を診察する度に思うのだが、人間長生きをするほど多くの病気をやるものだ。そのところを自覚して生活しなさい」

等々、なるほどといえるような意見を披露する。口は悪いが患者の話はよく聞き、寄り添ってくれる。病状に合わせて「詳しいことは専門医で診てもらいなさい」とすぐに紹介状を書いてくれる。

こんな先生であるが、皆が頼りにして地域のかかりつけ医としてはなくてはならない存在になっている。わが町の「赤ひげ先生」と呼ばれている所以である。

今日も徒歩か自転車、健康長寿を願う高齢者がK内科医院に来てい

作者 坂崎広典

題名 わが町の赤ひげ先生

山陽新聞夕刊

2019.12.19 掲載